

第38号
Vol.13-2
2016年9月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒859-1215 長崎県雲仙市瑞穂町古部甲1572番地 社会福祉法人南高愛隣会内

TEL: 0957-77-3600 FAX: 0957-77-3966 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 田島 光浩 編集人: 中澤 和代 Tel/Fax: +60-84-31-0757 E-mail: info@ace-jps.com ; gkerkn@gmail.com



「ムヒバ」の池修理・落葉樹をみんなで除ける

撮影者 中澤 和代

ボルネオの自然の中で、みんな汗を流していると心地良く、穏やかな気分だ。だが、マレーシアも今は大変な時を迎えている。国民に人気のマハティール元首相は一向に直らない汚職や権力乱用に抗議して、遂に新党結成を発表した。国を改革できるのか、国民の関心が集まっている。

世界を見渡せば、爆音や銃声、テロ。毎日のように多くの血が流されている。戦火に任せ、飢えに苦しみ、行くあてのない子どもた

ちが各地に溢れている。

日本は爆音も飢えもなく一見平和だ。さらに快適な暮らしを求めて、経済最優先をスローガンに、お金が最高価値のような空気が漂う。戦火がなく快適なのは良いことに違いないが、海外は日本を心配の目で見ている人が多い。災害も原発事故も軍隊も、丈夫なのか、と。武器を持って外国に行かない、憧れの日本だったのに…。

国内で信じ難い凄惨な事件が起きた。支援現場にいた人による犯

罪。今日本が歩み始めた道と併せて直視しなければならない。経済重視一辺倒、弱いものは不要という偏見や人命軽視、マスコミの事なかれの対応…。自利心に欠けた自由競争は弱者切り捨ての温床だ。目覚めた者が輪を広げ、行動を強化し、早く正気を取り戻さないと日本が危ない。90歳を過ぎたマハティール氏の心意気に叶わないと言わず、日本の誇りを呼び戻す国民的運動が求められている。あまり残り時間はない。(健)

サラワク在住40年

酒井 和枝
(クチン 在住)



墓標の修復に思いを込めて



きたのです。当然ながら、サラワク州での私の傍らにはいつもサラワクの人たちがいました。身近には今年で24年目を迎え、今も私

で、持参したお弁当のおかずを交換しながら昼食の時間を過ごすのも楽しみの一つ。このように多くの人たちとの絆は、私のサラワク在住にかけがえのない宝物として絶え間なく積み上げられる現状を感謝しております。

私はサラワク在住40年を記念して、もう一つの大きな課題を見つけました。クチンの日本人墓地の墓標の修復です。サラワク鉄木を使って、毎日少しずつ彫刻刀で彫り進めている真っ最中なのです。Dari Kuching第4号にも投稿させていただきましたが、今回、この時期に投稿の依頼を受けて、日本人墓地との不思議な縁を感じております。今、修復している墓標は、1967年(昭和42年)に修復されてから今年で49年になり、ほとんどの文字が見えなく朽ちている墓標です。墓標に書かれていた文字はコタキナバル連絡事務所に保存されている資料と、1982年にクチン日本人会が発足した年、墓標の文字などが読み取れる部分は記録として残そうと書き留めた記録を合わせて参考にしています。こうした記録を再度、詳しく調べた結果いちばん古い墓標は、1902年(明治35年)。最新は1991年(平成3年)。現在30基の墓標が立っています。

クチン日本人墓地は、クチンの中心地から10分もかからない場所にありますが、鬱蒼とした木々に囲まれています。毎月の草刈りや植木の手入れなど、コタキナバル連絡事務所から、クチン日本人会経由で依頼された墓守としての私の歳月も16年目になります。日本からの観光客や植林グループの墓地訪問、クチン日本人会によるお盆の墓地清掃などで邦人の方々のお参りに備えています。木々の中で静かに佇む日本人墓地…。この墓標を新しくする機会に恵まれていることは、墓地に眠る人々から40年在住へのエールをいただいているとも感じます。これからもこの地で根をおろし、サラワク日本人として、頑張る時を重ねて行きたいと願っております。

この度は2度目の“Dari Kuching”の投稿にお誘いいただき心より感謝申し上げます。サラワクで在住40年目を迎えました。最近、若干21歳の若さでボルネオ島サラワク州に渡った時のことを時々思い出します。

ボルネオ島に渡ったのは、まだ昭和の時代。未知なる世界の扉を開くという感覚でした。習慣や言語の違い、見たこともない植物や花、果物などがある環境への興味で毎日ワクワクしながらの生活でした。まるで子どもが新しいおもちゃを与えられたかのように日々の暮らしから得る経験は、水が土の中に吸い込まれるように自分の中に蓄積されました。この経験はサラワク州ミリの街から始まり、その後、クチンへ引越という経緯で、結婚～出産～育児～離婚～会社設立と流れてきたのです。その節目には、私の周りに関わったサラワクの人たちとの絆が大きく膨らみました。サラワクでの40年を語るには、サラワクの人たちの優しさや愛のある厳しさを知ったことが前提にあります。

肉親や友だちのいない異国で子育てをしながら、シングルマザーで人並みの生活をするのも大変だった30代。早朝から深夜まで、時間に追われる仕事一筋の40代。レストラン業から旅行業への移行、観光・熱帯雨林再生のNPO立ち上げの50代から現在まで。忙しく、しかし、充実した40年間を過ごして

の家の事を取り仕切ってくれている先住民族(ビダコ族)の女性(私より2歳年下)がいます。彼女は、サラワクとインドネシア国境の近くに生まれ、多くの兄弟姉妹がいて学校にも通うことができずに育ちました。私に出会う前は近くの村の畑で農作業を手伝い、同居している家族の面倒を見ながらの生活だったようです。

彼女が35歳で私のところに来てくれた時は、彼女のビダコ語と私のまずいマレー語での会話で、家事のお願い事や私が仕事に出かける際の子どもたちへの連絡事項など、身振り手振りでの会話でしたが、お互いに気持ちは通じると信じて暮らしてきました。その彼女も、今では日本語を理解し、日本料理を作ることも上手になりました。日本の正月のお節料理やお餅まで一緒につくり、まるで日本人のようです。常日頃から、今の私がいるのは、彼女のおかげだと感謝の気持ちを持ち、現在は、成長した息子家族や孫たちと共に過ごす我が家の家事を取り仕切っています。日本には、“言葉が通じなくても心は通う”という諺がありますが、サラワクでも同じだと思う歳月です。

今年で20年目になる熱帯雨林再生活動についても、森の中での植林活動は大変で、共に大汗を流しつつ、笑顔が絶えない先住民族と一緒に作業できる幸せを感じております。大きく成長した木々の下

母の国、日本での留學生活

ALVIN LEAN JUN KOU

(北田 隼昂)

佐賀市在住(マレーシア ペナン出身)

私は2014年4月に一人で東京に行き、日本での留學生活を始めました。何故、私が日本に行くことを決めたかと言いますと、この2年前、私は母、弟妹と一緒に日本で1ヶ月過ごし、マレーシアに帰ってきて、悲しみを覚えたのです。それは、休みが終わったから悲しいのではなく、日本を離れるのが嫌だという感じ…。自分がいたい場所は日本だと自覚し、日本への留學を決めたのです。

日本の大学に入るための条件の一つに、外国における学校教育12年の課程を修了した者。12年未満の場合は、日本の文科省で指定された準備教育課程を修了し、18歳以上であるということでした。マレーシアでの基礎教育は11年しかないため、私はあと1年勉強する必要があります。私は東京の日本語学校で準備課程に1年間通いました。それまで自分の進路については、建築か、あるいはコンピュータ技術を勉強するかと迷っていました。しかし、東京で色々な建築物を見てそれらに憧れ建築士になろうと決意しました。最初はできれば東京大学、または横浜国立大学に入学することを目標にしていたのですが、勉強を始めてみると、日本とマレーシアの間に大きな学力差があることが分かり、日本語学校の他に塾にも通いました。その後、私の祖父母が鹿児島に居ることもあって、九州の国立大学を目指すことにしました。鹿児島大学、熊本大学、佐賀大学を受験しましたが、受かったのは佐賀大学だけでした。最初は佐賀は田舎という印象があったため、佐賀大学に行くのに多少の抵抗がありました。しかしながら、私は後々自分は佐賀大学に来たことが運命であるのだと気付くのでした。私は佐賀大学の理工学

部都市工学科で建築について勉強することになりました。東京の日本語学校とは違い私は学科内だけではなく学部内唯一の留學生。周りは日本人ばかりという新しい環境で勉強を始め、不安でした。しかし、日本語を幼いころから話していたからか、周りから自然と受け入れてもらうことができ、日本人の友達もたくさん作れました。

大学の授業は、マレーシアとの学力差がある上、電卓を使わない計算方法であるため、とても難しいです。でも、私の友達、先輩、さらにチューターの先生が私の手助けをしてくださるので、今ではある程度ついていけるまで頑張れ



各国留學生とともに(前列右 隼昂さん)

るようになっていきます。また、留學生の歓迎会をきっかけに佐賀大学の他学部の留學生と触れ合う機会を得、ベトナム、タイ、フランスなど様々な国から来た留學生と交流できています。彼らを通じて私はいろんな国の文化に接し、新しいことを勉強し、様々な国の友達が徐々に増えました。今、私の留學生活は充実しています。

佐賀にはSPIRAという県の国際交流協会があります。私はその協会の国際理解講座の講師として登録し、小学校や中学校だけではなく、老人クラブなどで自分の国マレーシアの紹介をしてきました。日本の学校に行くと感じるのは、生徒たちの礼儀正しさです。マレ

シアの留學生が礼儀がないわけはありません。私が訪問すると、生徒達はきちんと挨拶するだけではなく、私の国についてあらかじめ予習して、私の発表を聞いてくれていました。その他に私が驚いたのは、日本人のおもてなしの心です。私が学校などに行った際、熱心に歓迎するだけでなく、飲み物やお菓子を準備し、本当に歓迎の気づかいを感じました。また日本人の子供は成長するにつれて恥ずかしがり、あるいは人見知りになってくることです。私が小学校で自分の国の紹介をすると、児童たちは積極的に質問をしてきましたが、中学生や高校生に上がるにつれて、だんだん質問をしてくれなくなります。

このような留學生活を過ごしている私ですが、今の私があるのもたくさんの人から手助けしてもらったからです。東京では最初の頃、母の友達に日用品や家具を買うのを助けてもらったり、ホームシックになった時にはご飯などに誘っていただいたりといったことが大きな支えになりました。佐賀に来てからはSPIRAの人たちや先生にいろいろアドバイスしてもらっています。

今、私にとって一番大切なのは周りにいる友人たちです。留學した最初の頃は周りに友達はいなかったのですが、今ではたくさんの友達に恵まれています。彼らは私に楽しい時間を作ってくれるだけではなく、悲しい時やきつい時に私の側において、支えになってくれています。これからも多くの人たちと交流しながら、頑張って、両親だけでなく、今まで助けてくれた全ての人たちに恩返しできるように、感謝の気持ちを忘れずに留學生活を過ごし、できれば就職も日本でしたいと考えています。

巡りあい・運命の糸

中澤 和代

サラワク州に来て13年になる。Dari Kuching第1号発行は、2004年5月、サラワクで8か月目の春、州都クチンの周辺福祉状況を調査しつつ、先ずの活動としてニュースレター作成を企画した。クチン在住・青年協力隊の若者たちを中心に声をかけ、日本への情報発信をどのように行うか編集会議と称する楽しい時間を共有した。毎号の「じゃらんじゃらんちゃりかわん」書き手の上杉誠氏は第1号からの継続した執筆者である。

サラワクで活動するというのは夫(健)の宿願であったが、父親の戦没地という以外、特に知り合いがいるわけでもなかった。私たちは2003年4月にクチンを訪れ街を見て回った。この時、夫のペナン時代からの知人、古岡文貴氏に私たちのサポートを依頼された若い江川恵さんから夕食に招待された。クチンの活力に満ちたビルの屋上屋台で紹介されたのが、今号2回目の執筆をしてくださっている酒井和枝氏である。ほんの数分の会話中、酒井さんが私の故郷と同じ徳島県出身だという偶然。3か月後、住む家を探すため、私たちは再びクチンを訪れた。何とか不動産屋さんを探さねば、と考えていた矢先、酒井さんのことが頭に浮かび電話をした。すると「あーら、私、今シンガポールなの。夕方ならホテルのロビーで会えますよ」と。そして5時半、酒井さんが来てくださった。事情を話すと「そう言えば、私、日本人に家を貸したいという人を知っているんだけど会いますか?」20分後、私たちは、酒井さんに連れられてJosephさん夫妻に初めて出会ったのだ。木材と煉瓦を使用した素晴らしいお宅。一目で気に入る。その場で交渉成立。中に坂本龍馬の壁掛けがかかっている。何故?と質問したらJosephさんは日本の高知大学でPhDを目指して勉強中とのこと、不思議な縁を感じた。そして2003年9月、彼は私たちをクチン空港で出迎えてくださった。

種々の登録、必要な買物等をサポートしてくださったのもJosephさん。クチン生活第一歩を踏み出した我々に必須の滞在ビザ取得につき、保証人を引き受けてくださったのは酒井和枝さんだった。その頃には酒井さんが「地球の歩き方」に「サラワクの母」として掲載されている方と知り、親切で気さくなお人柄に感謝した。

家主のJosephさんは、その年の暮れ、ご自分の故郷、カナウイトでの迎春と身内の結婚式に招待してくださった。彼は、当時、勉学の傍ら、すでに政府森林局の高官であったが、訪問3夜目、このロングハウスの続きに私たちの住居を建てないかと提案をしてくれたのはJosephさんの兄、Michael氏であった。二人の会話を聞きながら、このやりとりは、リップサービスだと受け取っていた私。実はMichaelさんも夫も本気だった。3か月後、未明の薄明かりの中、民族の慣習に沿った祈りと共に村人総出の建前がはじまった。

住まいの建築中から、村落部のニーズ調査を行い、終日木槽の中で過ごす少女との出会いを経て、デイセンター構想、日本人ワークキャンプ募集と実施、Mhhibah開設・運営へと続いた。キャンプとの出会いもそれぞれに濃く、地域住民、Mhhibah、及び私たちにとって、大きな意味を持つ。さらにJosephさんは、センター準備中にRCS(団体)の登録手続きに力を貸してくださり、今現在は、RCSの次期責任者として予定進行中。

考えてみるとこれらは「一直線に続く太い道」のようだ。人が人と巡りあうというのは、本当に偶然なのだろうか?誰か?神様?が決めた必然ではないだろうか?未来だけではなく、過去に通ずる運命的な出会いも経験した。

2010年、サラワクを訪れた義姉とともに義父につながる手がかりを求め、戦時下、義父が勤めていた会社(嘗ては日本軍需工場)を訪ねた。その時、祖父、父、自分

と3代にわたり、この会社で働いてきたという女性に出会った。彼女は「父なら何かわかるかも?」と昼休み、自宅に案内してくださった。1942年から1945年、日本軍の命令により、15歳で義父の管轄する会社の守衛をしていたというAwang Nona氏(87歳)。私たちの示した義父の写真を見るなり「ナカザワサン!」と叫んだ。まさに「運命の糸」の如き繋がりを感じた瞬間。義父を知る唯一の生存者と巡りあえた驚き。今では何う度にも本当の家族のように抱き合う。

私たちには他にもサラワクで多くの知り合いが出来た。一人ひとり、みんな大切な方々である。古くはSibuの街の家

にお掃除に来てくれていた一家。当時、中学生だった娘さんが今は結婚しクチンで立派な家庭を築いている。時々、子どもの顔を見せに来てくれるのが嬉しい。開設したばかりのMhhibahセンターで、ライオンズクラブの協力を得、無医村落の健康診断を実施した。その折のDr. Bettyさんは今や私たちのHome Doctor。Mhhibahセンターの当初から協力してくれた中国系の方々。名も告げずMhhibahに大量の資材を提供してくださった人、最近出会った新聞のレポーターや車の修理屋さん、国、民族を超え知り合った人々。個人として、人は必ず仲良くなれる。それに引き替え国レベルでは?

今こそ世界の民として、平和に向かう行動が必要ではないだろうか。



ACSはいま khor Ai-Na

ジョージタウンのお店で販売 (ACS・ステッピングストーン)



ジョージタウン・お店の様子



店内—絵画・染め物・小物・焼き物など

最近、ACSペナンは、街の土産物販売店から、ACSの製品を販売する場を提供したいとの連絡を受けました。このお店は、世界遺産に指定されたペナン・ジョージタウンの観光通りに位置しており、人の出入りがとても多いところです。

私たちに与えられるスペースは、大体 350 Sq ftの広さがあり、そこでACSの手工芸品を販売できるという夢のような話です。アウトレットのお店を持つということは私たちの夢でした。

このような機会を得られ、ACSステッピング・ストーンで生産する高品質な製品を通じ、障害をもつ彼らの能力が再評価され、市民にポジティブな意識改革をもたらすことを確信しています。コミュニティから信頼され、さらなる挑戦に向かうACSを応援してください。(翻訳：文責 中澤和代)



RCSはいま 中澤 健

☆☆☆なかなか解決しない課題☆☆☆

「ムヒバ」の日常は楽しい。当然ながら、常に様々な課題を抱えているのも事実。極楽とんぼではいられない。運営管理上のことは別にして、利用者について現在進行中の二つのことを紹介する。

以前も紹介したが、8歳のピアは「ムヒバ」から30分離れた村に住んでいて、近くの車にお金を払って送迎して貰っていた。足の変形で彼女は歩けないが、何処でも膝を使って四つん這いで移動出来る。壁に手をつき伝い歩きも出来るようになった。Sibuの街のAGAPEといういわば障害児総合センターの整形外科とPTに診て貰い、「ムヒバ」でも毎朝と午後15分ずつ訓練を始め、歩行訓練用の平行バーや歩行器を買ひ、装具技工士に靴も作ってもらった。膝の筋肉も大分柔らかくなって、本人も意欲的に訓練を楽しんでいた。ところがGawaiというイバンの収穫祭の休みが終わってから、突然彼女は「ム

ヒバ」に来なくなった。何とか彼女が自立歩行出来るようにと願っていた私たちは心配したが、熱が出たとか、本人が嫌がっていると行って来ない。また筋肉が固まってしまっは大変。杖をついても自分で歩けるか、道も未舗装の村で車椅子を使うかでは、彼女の人生は大きく変わる。スタッフ全員で彼女の家を訪問し、話し合いを始めた。両親にも障害があり、父親はかたくなで、未だに解決していない。何とか訓練を再開したい。送迎車のドライバーとの問題もあるようなので簡単ではない。他の選択肢はない。これが発行される頃、彼女が「ムヒバ」で友だちと再会し、訓練にも励めるようにと祈る気持ちである。

サディアさんは37歳。「ムヒバ」に来るようになって5年になるが、親は離婚後、それぞれ再婚し役所に届けが出来ていないため、ID(身分証明カード)も障害者カー



ピアちゃん



サディアさん

ドも貰えず、障害手当も出ない。何とか手助けするように言いながら結局3年かかった。最近になってやっと目処が立った。まだ支給は受けていないが、彼女が喜ぶ顔が早くみたい。それにしても、もっと素早い支援が出来ないかと、もどかしい限りである。

じゃらんじゃらん ちゃり かわん♪(37回)

サメってホントに怖い? (ネムリブカ) 上杉 誠

皆さんの中での「サメ」のイメージってどんな感じですか? たいはいる人は人を襲うとても怖い存在として、イメージされるのではないのでしょうか。ところがサメが人を襲うことはほとんどありません。世界中の人間の死因の中で生き物による被害は数多くありますが、その中でもサメによる死亡事故というのは実はほとんどありません。ちなみにサメによる年間の死亡数はおよそ10人。百獣の王ライオンは100人。人を襲うイメージのあまり無いカバなどはなんと500人もあるそうで、小さな生き物である蚊に刺されたことが原因での死亡数にいたってはなんと72万人と言う事でサメに襲われて死んでしまうことは飛行機事故で死ぬ確立よりも低く、全くもって怖い存在とは言い切れないと僕は思っています。

怖いイメージを想起させるのは沢山の鋭い歯を持つその顔面のせいで、顔で損をしてしまっているとも言えるでしょう。そしてそのイメージを増幅させてしまったの

は映画やテレビなどで人を襲うシーンを見る機会が多いからかもしれません。彼らに言わせれば、風評被害も甚だしいと言ったところでしょうか。確かにサメの仲間には肉食で大きくなるものも多く、有名なホホジロザメなどは5mを超え、アザラシなどの海棲哺乳類やウミガメなども捕食するため、それらの生き物と誤ってサーファーなど人間を襲ってしまうこともありますし、一度美味しそうな臭いや死に類した生き物が出す微弱電波を感じると一気にスイッチが入ってしまい、凶暴化することがあるのも事実です。ところがサメの仲間は2m以下のものが多く、自分と同じ大きさの人間を襲うことはほとんど無いのです。むしろかわいい顔をしたサメも多く、日本にいるネコザメやインドネシアに居る歩くサメとして知られる平べったい顔にもじゃもじゃのひげを生やしたオオセなど、愛らしいサメもいるのです。そんなサメの中でもボルネオで出会う機会が多いのは「ネムリブカ」。サメの仲間



かわいいネムリブカ

では珍しくあまり泳ぎ回らないサメで、砂地などで着底し、じっとしていることの多いサメです。人が近付いても動かないことも多いので、まるで寝ているようと言うことで「眠り鯛」と呼ばれますが、じっとしているからと言って眠っているわけではなく、ちゃんと起きています。ちょっと口を開けているので歯も見えますが、小さな歯ですので、あまり怖い印象はありません。むしろかわいく見えるのは僕だけでしょうか。時として水底や洞窟の中で折り重なるようにして集まって寝ている姿もかわいいものです。

ボルネオの海でダイビングをすると、このネムリブカに出会うチャンスがあります。もし寝ているところに出会っても、起こして邪魔しないであげてくださいね。

Jalan jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

おしらせ

新ACEが始動!

前号で、ACE事務局の移転をお知らせしましたが、6月11日に東京で開催されたACE総会で、役員の変更がありました。私、中澤健は理事長を辞任。新しい理事長には、かねてからお願いしていました田島光浩氏が就任しました。事務局長は、社会福祉法人南高愛隣会、財務部長の釣船一満氏です。なお、長く理事を引き受けて下さった小室道章氏、小野鎮氏は辞任されました。ACEによるマレーシアの障害福祉の支援活動は、これからも続きます。皆様のご支援をよろしくお願いたします。

編集後記

年月は、自分の感覚よりも速く過ぎ去るものだと実感しています。日々、雑務に追われ、自覚なしに歳を重ねているような。今号、記事をお寄せいただいた酒井和枝様との出会いから、これまで13年。もう一つの記事の北田集昂青年にはじめて会ったのは、彼がまだ小学生になったばかりでした。Dari Kuchingの読者の皆様は紙面を通じてお会いできるのはあと一号、淋しいですが時の流れに任せます。(Kenzo)
本紙は今年度限りで一旦廃刊します。私共が帰国を計画しているからです。次号(2017.1.1発行)が最終号になると思うと、感慨深いです。というか正直寂しいです。前身の《Dori Pinang》時代から「日本社会福祉弘済会」がスポンサーを買って出てくださいました。これから数ヶ月、最終号の準備をしながら感謝、感慨を味わいます。(Ken)